

観 音 日

昭和62年1月

第6号

年2回発行

編集発行

小出真行



正観寺秋季観音大祭 柴燈大護摩供

結果だけが尊いのではない
ほとけになろうとするその努力が尊いのである

(秘歳記)

たんじょう日

私達人間の一生には四つの誕生日があります。

第一の誕生日

母の胎内から生まれる日で、何ものにも

穢されない、純真清浄な生命の生まれた日。

第二の誕生日

自我の目ざめの日で、「人生とは何か？」

「いかに生きるか？」など、自分の生涯

の生き方に問をもつ時。

第三の誕生日

信仰に目ざめる日のことで、人間として

生きる本当の道を見出した日。

第四の誕生日

人間としての生命が、迷える人間界から、

迷いなきさとの世界に誕生する日。

さて皆様はどの誕生日を経過されましたか。

仏出来る様に祈る事

他行とは、他人の為に息災延命や事業繁栄等の現世利益を祈る事

で、この他行の方法に四通りあり

(一) 息災法 国家社会の安泰を祈り、また病

災等の悪事災難を除いて無事息災に生活出来る事を祈る

(二) 増益法

人々の繁栄と社会の福祉増進を祈り、また個人的な事業の成功や一家の幸福を祈る

(三) 敬愛法

世界の平和を祈り、人間関係では相互に尊敬し合い、みなが愛し合って交際を円満にし、家族の幸福を祈る

(四) 調伏法

私たち人間社会に害悪を与えるものを排除し、社会を毒する事業をなくして、自分の心中における不正な欲求の調伏を祈る

この様な祈禱法は、高祖弘法大師より伝って、嚴重な秘法を修して、祈るもので至誠の発露のうえに如来の功德(加被力)をこうむり、その上に社会の環境の刺激や援助とが加わり、不思議な靈驗が現れるものなのです。

例えば、「参禅の結果、健康になった」と言う事もよく聞きますが、これは参禅した結果加持力に付随して起る徳にすぎないのですから、清浄な信心を忘れて、ただああしてほしい、こうしてほしいとご利益のみさきばし

る加持祈禱は意味がないものになるでしようしご利益も薄くなるでしよう。という事は、日常の信心がそれほど大切かおわかりになると思いますので、どうぞ皆様も信心を持って安らかな生活が出来る様精進したいものですね。

「お 彼岸」



「暑さ寒さも彼岸まで。」とよく言われていますが、この「お彼岸」は季節的には、暑さの苦しみから涼しさの楽しみへ、寒さの苦しみから暖かさの楽しみへ移り変わる時期なのです。

では、仏教的にはどうかと申しますと迷いの世界から悟りの世界へ、苦しみに満ちた生活から楽しみ湧れる生活へ転換する意味の「パーラミタ」という 語を「到彼岸」と訳したことからきています。春分の日を中心にしてその前後に三日ずつ加えた七日間を指しています。

では現在の日本ではどうなっているかと申しますと春分の日を「自然をたたえ生物をいつくしむ日」とし、秋分の日を「祖先をうやまい、なくなった人をしのぶ日」として、仏教的精神に基づく国民の祝日となっているのです。

暦の上では、太陽が黄道を西から東へ移動するとき、赤道を南から北へよこぎる点を春分点または秋分点というのであり、この日は昼と夜の長さが等分になり、寒暑の分れ目でありますから人間の生活上でどうしても無視出来ない日でもあるのです。

今日私達は、季節的にも暦の上でも意味深いこの日を大切な信仰の日としてお寺やお墓にお参りするのですが、ただお参りするのではなく

- (1) 人には親切に
 - (2) 自分を反省し
 - (3) 何事にも辛抱し
 - (4) 何事にも努力し
 - (5) 心を豊かにして落ちつけ
 - (6) 正しい認識をもっての行動
- の六つを実践することによって毎日毎日が安らぎのある生活になる様心掛ける事が大切なのではないでしようか。

編集後記

皆様方の、考え方や人生論等を記載致したく思いますので、どうぞ申し出て下さい。



般 若 心 經

「無無明 亦無無明尽
乃至無老死 亦無老死尽
無苦集滅道 無智亦無得」

(無明もなく、また無明の尽くることもなし、乃至、老も死もなく、また、老も死の尽くることもなし。苦も集も滅も道もなく、智もなく、また得もなし、)

「無明もなく、また無明の尽くることもなし、乃至、老も死もなく、また、老も死の尽くることもなし」

の無明とは、世の中のあるがままの姿を見極める正しい智慧がないために闇におおわれ苦しみ迷う事で、キリスト教で説く原罰のようなものです。その無明の弱仕も、その原因や結果すらないという事を指しているのです。釈尊は、最初の「無明」から最後の「老死」

までを人生の無常や変遷について、その原因から次々とさかのぼって追求し十二の系列を立てられました。それが「十二因縁」であり「十二縁起」でもあるのです。これは、人が過去から現在に生まれて死んで、未来に生

きて行く、過去、現在、未来の三世の空間の流れを十二項の原因と結果で説かれた因果関係なのです。それは

無明 (迷いの根本である無知)
行 (無明から出てきて、次の識を起す位)

識 (受胎の初一念)

名色 (母胎の中で心作用と身体が発育する位)

六八 (眼、耳、鼻、舌、身、意、の六根が具って、まさに母胎を出ようとする位)

触 (苦楽を識別することなく、物に触れる位 2と3才)

愛 (苦楽を識別して感受するようになる位、6と7才)

取 (種々の欲望があらわれて苦を避け樂を求めようとする位)

有 (自分の欲するものに執着する位) (存在しているもの、あるものを自分のものにしたいたい欲が起る)

生 (衣食住等の所有)

老死 (訪れる老いと死)
の十二項からなっています。

はじめの「無明」と最後の「老死」だけを空じて、中間の十箇の縁を「乃至」として省略されていますので十二因縁の全てを空じている事は、文体で明らかです。

「無明もなく、無明の尽くることもなし」とは全てを空じつとした眠で実感すれば「無明」などないと否定し、さらに「無明の尽くこともない」というのです。平たくいえば迷いもなく、迷いがなくなることもないという事になります。それは、迷いが根こそぎ絶滅されるのではなく、迷いがあるままに、その迷いに惑わされない「こころ」を掌握することなのです。そうすれば、「無明」という名の迷いはあってもなくても別に問題ではなく邪魔にならないのです。

同じように「老いも死もなく、老いと死がなくなくなることもない」のは、私達は、生まれたら、必ず老い、そして死がおとずれるのです。こういう因果の鉄則から避けられないのです。生死を空するのではなく、「生、老死」の現実界に生きて行きながら、現実の姿にとらわれず、生きて行くべき事を説いているのです。



「苦も集も滅も道もなく」



とは、人生の現実には苦に満ちており、生きることも、老いることも、病気になることも死ぬことも、どれ一つにしても苦につながらないものはないが、それすらないということです。この四つの苦しみ（生老病死）に

愛別離苦（愛する人と別れなければならぬ

の苦しみ）

怒憎会苦（嫌な人と会わなければならない

の苦しみ）

求不得苦（欲しいものが得られない苦しみ）

五陰盛苦（身心から生ずる苦痛が盛んに起る苦しみ）

の四苦を合わせて仏教では「四苦、八苦」と言っています。こうした苦しみを制するには

その原因をしらべ（集）それを除去（滅）しなければなりません。その具体的な実践方法

（道）として「八正道」があるのですが、この八正道とは

正見（正しい見方） 正命（正しい生活）

正思（正しい思い） 正精進（正しい努力）

正語（正しい言葉） 正念（正しい決断）

正業（正しい心構） 正定（正しい専念）

の八つの正しい道の事です。

「智もなく、また得もなし」



とは、私達の智恵や知識にとらわれることなく虚心担懐（何のわだかまりもなくさっぱりした心）に生き、自我心を取り除き、利己心の根を抜いて損得というはからいを捨てて自由無得になるべきことを指しているのです。

要約しますと、さとりもなければ迷いもなく、さとりがなくなることもなければ、迷いがなくなることもないのです。こうして、ついに老いも死もなく、老いて死がなくなることもないという事に至るのです。そして苦しみの原因も、苦しみを制することも、苦しみを制する道もないのですから、何のわだかまりも捨てずなおに老い、すなおに病み、すなおにさよならをして行く生き方を手に入れることなのです。

「お 加 持」



「加持というのは如来の大悲と衆生の信心とをあらわす。

仏の日の影が衆生の心の水に現われるのを

「加」といい、行者の水がよく仏の目を映しとるのを「持」という」

即身成法義より

そもそも「加持」というのは、如来の慈悲の心と私達の信心とがどの様なかかわりあいをもっているかを述べたものであります。では、どのようなかかわりあいをもっているかと申しますとそれはちょうど大空に光り輝くお日様の光が宇宙を明るく照らして地上の全ての物を育てています。それよりもより素晴らしいお日様の「霊光」が私達の澄みわたった信心という心水にふり注がれて、その「霊光」が反射して澄みわたった信心という心水が光り輝くようになるのを「加」といい、私達の澄みわたった信心という心水にその「霊光」が照り映えて、み仏があたかも、一子に対するように護念して下さっていることを感じて、それを有難くいただきそして保ちます。澄みわたった信心という心水を光り輝かして仏の子として生きること「持」というのです。

これは仏の「霊光」が私達の信心にはっきり映えるように拜んでいる私達と、拜まれている仏とが対立しているのではなく、仏と私達とが一つになっちゃった状態に他ならないのです。

また「祈禱」というのは、いわゆるお祈りであり、祈りとは「忌み宜る」という言葉でありますので、心の汚れをなくしてから、願いを述べたのですが、この「祈禱」には、自行と他行の二種がありまして、

自行とは、行者のみが教えによって即身成